

# 餃子もいいが、石もすいい

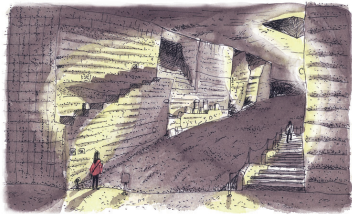
—— 栃木・宇都宮市

関東平野北端に位置する宇都宮市。古く奈良・平安時代から街道のまちとして栄え、五街道が整備された江戸時代には日光街道と奥州街道の追分、つまり分岐点となつてさらに発展を遂げた歴史があります。

もつとも最近では餃子の消費額全国一を毎年浜松と競うことで知られますが、実はもう一つ特産品がある。それが市内で採掘される「大谷石」です。太古の昔、火山灰が海底で堆積し、凝固した大谷石は多孔質で加工しやすく、長年建材として重宝されてきました。採掘エリアは市内の東西3km、南北6kmに及び、あちこちに巨岩が露出する風景が見られます。

大正末期、著名な建築家フランク・ロイド・ライトが大谷石を多用した旧帝国ホテルが、関東大震災にも耐えたことでさらにその名は全国へと広まりました。

左の絵は由緒ある石材店「屏風岩石材」。明治末期の座敷蔵と穀物蔵の2棟は当時の店主自らの設計で、ライト顔負けの洋風意匠が実に魅力的です。また、近くには地下神殿を思わせる採掘場跡や岩壁に彫った磨崖仏が見事な大谷寺なども、宇都宮は餃子だけじゃないんですね。



「大谷資料館」は広大な採掘場跡。  
地下神殿さながらの空間に圧倒される



# 海と共生するまちの夜明け

宮城・気仙沼市

「太平洋はどつちかな……」。夜明け過ぎの静まり返った気仙沼湾。港近くのホテル屋上からは、重なり合う岬と島に隠れて広い水平線が見えません。

それもそのはず、ここは三陸沿岸でも一番奥深く切れ込んだ波静かな湾です。外洋までは約10kmほどもあり、漁師たちに風待ちの港として重宝されてきました。

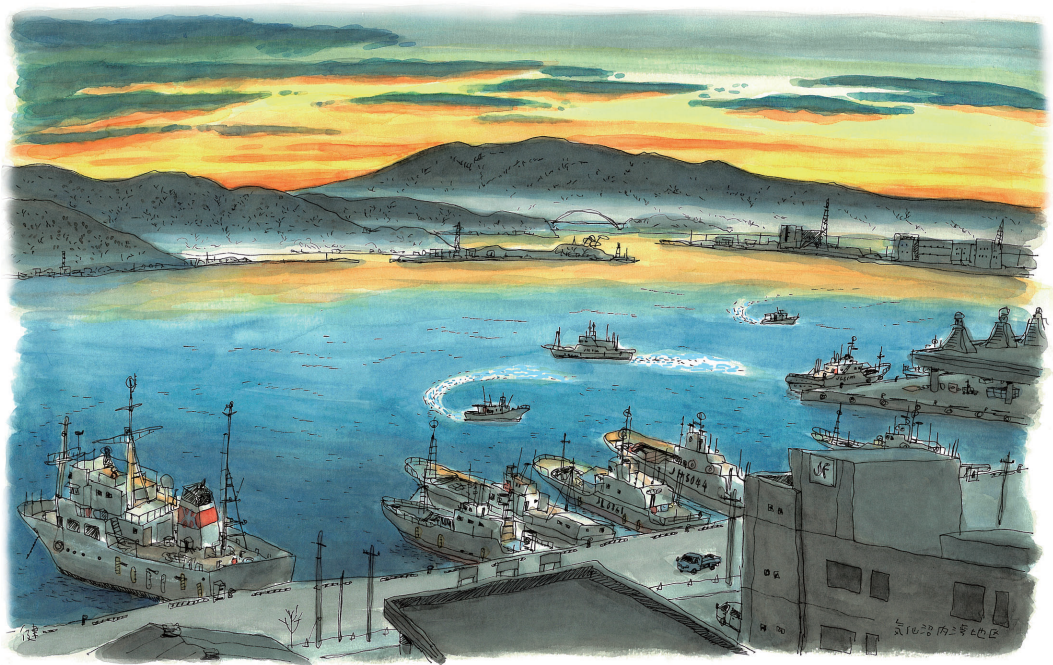
気仙沼が日本屈指の漁業基地として名をはせたのは古く、江戸前期のことです。

沖合は世界三大漁場と称される三陸沖。カツオ、サンマ、メカジキなどの豊富な魚種が海流とともに大挙してやってきます。また、地の利に加えて紀州のカツオ一本釣り漁師たちに教えられた漁法が、カツオの水揚げを飛躍的に高めました。

さらに、港湾の近代化をいち早く進めた昭和初期からは、遠洋漁船の母港として大いに活況を呈するようになり、遠洋マグロ漁の船籍数は現在でも国内有数を誇ります。

東日本大震災から9年。甚大な被害を受けた気仙沼は今、港町の歴史と文化を受け継ぎながら、新たなまちの魅力と防災性向上を目指す復興事業の仕上げ段階へとさしかかっています。

「ただ単に元へ戻るんじゃない、より良いまちをつくりたい」という地元の人々の話に、未来へ懸ける強い思いを感じました。



大正元年の創業「気仙沼 男山本店」の酒蔵と震災後に改装された客座敷

